

「全国総合開発計画」で用いられる言語に関する分析

佐賀大学大学院 学生員○黒嶋 欣吾
佐賀大学理工学部 正 員 荒牧 軍治

1. まえがき

戦後半世紀の間に、国土庁は次々に四つの「全国総合開発計画」を策定した。この公的な文章の中で用いられる用語を分析することにより、国土庁の考え方、政策を探ろうとするものである。

本研究では、「第三次全国総合開発計画（三全総）」「第四次全国総合開発計画（四全総）」に的を絞り、分析を行う。

この「全国総合開発計画」はいずれも、基本的な考え方を「国土の均衡ある発展」においた。そして日本経済の成長は、その都度この期待を裏切った。第一次オイルショックで高度成長に終止符が打たれたあとの「三全総」は、目標の達成に期待を込めて、「定住構想」を掲げた。だが石油危機後も日本経済は、先進国では異例の年率5%近い成長を続けた。さらに10年後の「四全総」も、「多極分散型の国土形成」とうたったが、これまたスローガンに終わった。地域の不均衡発展と首都圏一極集中は、かえって激化した。

2. 研究方法

本研究の主体となる「全国総合開発計画」を分析するにあたり、文書をコード化することで検索を進める。検索データの作成手順を表-1に示す。表-1における②～④の一連の作業をマッキントッシュのソフト『MacReader Japan 1.1』を用いて行う。

検索方法は、キーワードとなる用語を、〈接統詞的言語〉〈形容詞的言語〉〈判断言語〉〈方向・行動言語〉〈土木言語〉の五つのジャンルに大別し、検索用のプログラムは作成せず、“一太郎”の検索機能を用いてピックアップした言語を処理する。これを検索データとし、これより分析を進めていく。

3. 考察

1) 接統詞的言語の検索

定義言語（とは）、目的言語（には）を分析する。（とは）の活用は、定義言語として全く使用されていないことが解る。

2) 形容詞的言語の検索

（望ましい）（美しい）（豊かな）（新たな）を分析する。

（豊かな）の三全総、四全総における使われ方を表-2に示す。

表-2より、三全総、四全総ともに物の豊かさの充足から心の豊かさを求める傾向を示す文章が多いことが解る。三全総では、定住構想を実現するために、量的、質的水準を含む総合的な豊かさの均衡化を必要とし、四全総では、「個性豊かな地域」とあるように、東京一極集中が地方の画一化をもたらすことなく、地方の自立的個性的発展をめざし、多極分散型国土を形成しようとしていることが解る。

表-1 検索データの作成手順

- ① 全国総合開発計画
- ② イメージスキャナによる取り込み
- ③ 文書をファイルに入力し、コード化
- ④ 文書の修正
- ⑤ 「一太郎」の検索機能
- ⑥ 検索データ

表-2 形容詞的言語の検索（豊かな）

言語	数
豊かな	
三全総	23
四全総	12

三全総 23 国民生活は、[国]際にも極めて高水準の経済的豊かさを実現している。経済的豊かさを実現する。人間と自然とのかわりあいには豊かなものとなっている。国土への富集を高めることによって生活を豊かにしてきた。人々は私利私欲の充実、社会的消費の拡大、余暇活動の充実などより一層生活の質的豊かさを求めることとなる。ゆとりのある豊かな生活。豊かな生活への追求。エネルギーは、生産、流通、消費を巡る広い意味の生活の豊かさを支える最も基本的な資源の一つである。質的充実を図ることが豊かな生活を実現するために重要な要件となる。豊かな住。地域性の豊かな風土。定住構想に基づいて、都市、農村を通じて地域性の豊かな人間居住の総合環境を整備していく。定住構想を実現するためには、各地域の生活の質的・量的水準を含む総合的な豊かさを均衡化することが必要である。生活の豊かさの重要な要素である所得水準。うるおいのある生活と持続豊かな人間性の形成。地域の特性と独自性を生かした個性豊かな生活。自然環境や歴史的遺産等豊かな空間。安全で個性豊かな魅力ある環境。豊かな自然環境。物の豊かさの充足から心の豊かさ、生活のうるおいを求める傾向が次第に高まり、地域社会においても、人と人との豊さが求められている。人と国土の関係を豊かなものにしてきた。豊かな国土資源。豊かな水資源、森林資源、水産資源。

四全総 12 個性豊かな地域。新しい豊かな住まい方。豊かな自然と水。地域相互が個性豊かな異質なものに接触する。豊かな自然。個性豊かに活性化。新しい豊かさ実現。ほや水などの豊かな環境。豊かな水。貴重な国土資源である海洋、沿岸域を適切に保全しつつ、自然とのふれあい、資源、空間としての多様な役割、豊かさを今日に生かし、海の広大さ、豊かさを生かした新たな利用空間。地域開発の上でも、個性豊かな地域づくりの一環としてこれを活用する。

3) 判断言語の検索

(深刻) (弊害) (良好) を分析する。(良好) は、三全総、四全総ともに、環境、景観といった言語が続き、プラスイメージを強調するために多用された言語であることが解る。

4) 方向・行動言語の検索

16個の言語の使用回数を表-3に示す。表からわかるように、(形成) (発展) (育成) (強化) が激増し、(防止) (利用) (保全) が激減していることが解る。ここで、三全総と比較し四全総で多用されている、(形成) について分析する。201個の(形成)を構造解析したものを表-4に示す。表-4の「形成」の構造で、大きな骨格を成しているのが、四全総で目標に掲げている「多極分散型国土の形成」である。その枠組みの中に三つの柱となる「国土の形成」「交流ネットワークの形成」「活力に満ちた快適な地域の形成」が存在する。「国土の形成」において、国土の主軸をどこにとるのかを調べるために、(主軸)を検索したが、明確的に記述されていなかった。「交流ネットワークの形成」において、高規格幹線道路網の形成など陸、海、空の交通手段により、国内はもとより国外の情報ネットワークを形成しようとしていることが解る。「活力に満ちた快適な地域の形成」において、快適な環境・空間、特色ある産業・技術拠点、国際交流拠点の形成により、中枢・中核都市と成り得る地域の形成を目指していることが解る。

5) 土木言語の分析

(防災) (道路) (堤防) (空港) (ダム) (河川) (港湾) (地震) (災害) (土木) の分析をする。(道路) (空港) の使用回数が増加していることより、交流ネットワークの形成の充実が意図されていることが解る。また、(ダム) の使用回数も増加しているが、利水・治水の目的に留まらず、多目的ダムとしての利用が地域の活性化を促す一要因と成っていることが解る。

4. まとめ

「四全総」は、昭和62年に閣議決定され、「東京一極集中」を是正して多極分散型国土の形成を目標としてきた。しかし、「東京一極集中」は是正されるよりもむしろ加速的に促進されている。地方分権体制を誇示してはいるものの、今の現状は「四全総」とかけ離れたものとなっている。近い将来に「五全総」が計画されると思われるが、「四全総」の高規格幹線道路網計画の観点からより踏み込んだ、国土構造の改革方向を具体的に示す国土軸構想の策定が、強く求められる事になるだろう。また、多用かつ重層的な国土の均衡ある発展を実現するためには、各圏域がそれぞれ自己の責任において特色ある発展をめざし、行財政の主導権と政策の立案能力、政策決定・実行能力をもつことが不可欠であり、地方自治の確立＝地方分権が必要である。

【参考文献】全国総合開発計画：国土庁 五全総へ（関西からのメッセージ）：グローバル社会における関西圏研究会

表-3 方向・行動言語の使用回数

使用言語	三全総	四全総
確定	12	19
目標	56	28
考察	0	0
均衡	34	21
整備	610	679
防止	40	14
利用	306	181
形成	84	201
保全	193	113
開発	195	250
発展	53	92
振興	52	86
育成	16	81
維持	28	17
調停	17	22
強化	48	124

表-4 「形成」の構造

